

上意討ち

大塚 喜子

城から下がって、幾つもの門を通り抜けて空を仰いだ。堀端の二百本余りの垂れ桜の蕾は、このままの晴天が三日も続けば咲き始めるだろう。

―あと十日。この桜が、散るまでの己の命である。

大矢喜八郎は、松江藩筆頭家老大塚外記から、御用部屋で言い渡された「上意討ち」のことを反芻している。

この御用部屋は、初代松江藩主松平直政公が、祖父徳川家康公から賜って、江戸城内から移築したものである。喜八郎が入室したのはこの日が始めてである。

「これは名譽のお役目だ。討つ手に任せられるのは武道の譽れに他ならない」外記は扇を抜き、肥満した躰をせわしく扇いだ。首筋の皺の汗が、玉になって光っている。筆頭家老であっても、上意討ちを命じるのは平静でいられないようだ……喜八郎はそう思うことで落ち着きを取り戻そうとした。

「受け賜りましたが、西川数馬はどうして討たれるのでしょうか。その訳をお教えいただきたい」

数馬と喜八郎は幼いころから中川の藩校で学問を競い、白石道場で竹刀を打ち合った仲である。

「それは言えぬ。全ては殿の胸の内にある事だ」外記は再びせわしく扇を動かす、目の前に飛んできた蜘蛛を払った。蜘蛛は外記の頭に止まった。

「わしが思うに、西川は殿の逆鱗に触れたのであろう。大矢殿と数馬は白石道場の双璧だったそうだな。殿はその事を御存じであったぞ」言いながら、外気は善良そうな笑いを滲ませた。

「若き頃のごときです」

「あその流派はなんであったかのう？」外記は久しく剣道場に立ち入っていないようだ。

「無双直伝横田流にございます」

蜘蛛を目で追いながら、扇を帯の中に戻すと、畏まっている喜八郎に

「話はこれまでだ。しくじるなよ。其方は馬廻役で八十五石であったな。この度の上意討ちを果たせば、加増してとらせる」と殿が仰であった」と言った。

喜八郎は堀端から重臣たちの屋敷が並ぶ鎧町を抜けて、武士の家が続く弓町の中程にある屋敷に帰りついた。

日は三瓶山の後ろに傾いている。中海からの穏やかな風と、見晴るかす宍道の湖面を覆う茜色の夕焼けは、何時もと何ら変わらない。

「おかえりなさいませ」父の代からいる下僕の庄助が、気がかりそうな顔で主人を出迎えた。この度の筆頭家老の緊急な呼び出しが、平時は平穩なこの家に波紋を広げている。喜八郎は改めてそう思った。父の声を聞きつけた七歳になる娘の喜代が

「お父様、お帰りなさいませ」いいながら、両手で紙風船を抱いて走り寄って来た。その後から母の登志子が静かな足取りで喜八郎を出迎えると

「お城の御用はいかがでしたか？」

「それは、後ほど話します」と答えて風船ごと喜代を抱きあげた。紙から漏れる乾いた音に慌てる何気ない動作が、子を産んで、間なくして死んだ妻に似てきた。

喜八郎は着替えを終えると「一人になる」と言って部屋に籠り、差し前の手入れを始めた。無名の刀だが、祖父が藩主の共をして江戸へ上った折に、氣に入って手に入れた相州物の古刀である。刀箱から打ち子を取り出し、鞆元から切っ先迄、念入りに白い粉をはたいた。開け放した縁側から差し込む茜色の光の中を、ちらちらと飛ぶ粉は、庄助が砥石を砕いて微細にしたものである。柔らかく揉んだ美濃紙でその粉をふき取り、丁子油を浸した布で刀身に油を塗って鞆の中に収めると

母が入ってきて、喜八郎の前に茶をおいた。家老の要件を知りたいのは明白だ。喜八郎は問われる前に話し出した。

「お役目を果たせば御加増があるそうです」母の顔が明らかに翳った。そして話し出した。

「祖父の時に一度、そなたの父の時に二度、そのようなことが有りました」

話を聞きながら、喜八郎は茶を啜った。

「最初は父上も首尾よくいきました。御加増もありましたが、二度目のお役目は、返り討ちに合いました」

喜八郎は父の喜一郎が不慮の死を遂げたことは知っていたが、返り討ちだったとは聞いていない。つづいて母は

「失敗したからには、先に御加増いただいた三十石も召し上げられました」
淡々とした口ぶりに悔しさが滲んでいる。

「大矢家は代々武道に秀でた家柄です。その為に、時折こういうお役目を仰せつかるのです。母は自分に言い聞かせるように言った。

「して、この度の相手は誰なのですか」母の問いに喜八郎は口ごもった。数馬は住む町こそ離れるが、昔は剣の稽古の帰りに度々この家に立ち寄った。

「数馬、西川数馬でございます」

「なんと、あの数馬殿ですか」

「期限は十日後迄に、しかも、上意打ちの理由は教えてもらえませんでした」
「理由を教えないのは何時ものことです。でも、今日から十日の後までに討てとは、如何にも緊急で御座いますね」母が視線を庭に移したのに続いて、

喜八郎も庭と向き合って

「殿のご都合でしょう。五月雨前に江戸へご出立されますから」故意にあつさりと言った。ともあれ、自分は上意打ちを命じられたのだ。余計なことを考えたくなかった。己は何も考えず数馬を斬ればいいのだ。

「数馬殿は一ヶ月前に嫁をとられました。大層美しい方だそうですよ。亀嵩のたたら鉾の頭の娘だと、郷の兄嫁から聞きました。それも数馬殿の男ぶりを見初めた娘の方から望んだご縁だそうです」

仲間内の噂で、数馬が嫁を貰ったことは知っていたが、母が今言ったことは知らなかった。ここ八年間、二人は顔を合わせても、挨拶をする以外は言葉をおぼわしていない。数馬は殿に仕える近衆、喜八郎は馬廻役で役柄が違った。この間に喜八郎は嫁をめぐり、娘を得たが、妻を病で亡くしている。

喜八郎が婚儀に呼ばれることはなかったが、美しい新妻の横に座った数馬の幸せそうな姿を思い浮かべることが出来た。

藩主は四十歳になる。江戸表に正室と嫡男がいる。側室は国元に四人いた。

数馬は側室の側近くに仕え、見なくてもいいものを見、言わなくてもいい事を言ったのかもしれない。近衆は出世も早いが、余程気を配らないと役目をしくじると言われる。

何はともあれ、自分は上意討ちを命じられたのだ。余計なことを考えずに数馬を斬る以外ない。

喜八郎は次の日から出仕をやめて、午の刻の少し前に握り飯を持って、裏山に行き、劍の工夫をした。

先ず土の上に立ち、刀を頭上に抜きあげ、瞬時の速さで真つ向に振り下ろした。4半刻、同じ動きを繰り返して、刀を納めた。これは無双直伝横田流立ち技【暇乞い】の奥義（壱）である。相手に別れを告げる時に使う技である。

汗を拭うと、今度は土の上に正座して、垂直に刀を抜きあげると、瞬時に真向に切り下げ、横振りして鞘に納めた。此れは【暇乞い】の奥義（弐）である。【暇乞い】の奥義（参）は目を閉じ、膝の前に指先を衝き、風の動きを捉え、風と共に刀を抜き、草木を切り倒す。

三つの奥義の工夫をした後で、最後に、喜八郎は両手で刀を抜きあげ、振り下ろす事を百回やった。全て寸分の狂いもなく地面の同じところに刃先は留まった。

こうして喜八郎は【暇乞い】の工夫を5日間続けた。いくら稽古を重ねても身が震えた。

上意打ちする者は、斬る前に「上意」と言葉が発する作法がある。発した瞬間に数馬も刀を真上に抜きあげるだろう。二人が同時に抜き放った刀が頭上に振り下ろされれば相打ちになって、何方か、或いは二人が共に命を落とす。二人は互いに手の内を知り尽くしている。喜八郎は白石道場で、数馬が【暇乞い】と【受け太刀】を稽古していた姿を知っている。寝床について天井を見上げると、数馬が刀を振りかぶって切りかかってくる姿が浮かんで消えた。

「ずいぶんやつれましたね。この三日ばかり寝ていませんね」朝餉を下げながら母が言った。

「父上はやつれませんでしたか」上意打ちを命じられた父上がどうであったか知りたかった。

「ええ。やはり眠れずひどくお痩せになりました」

「討たれる者が誰かあかされましたか」聞かずにおれなかった。

「江戸の上屋敷の書院番だということでした」

「え、父上は江戸へ出向かれてお役目を果たされたのですか」

「そうですよ。最も相手の名前は教えていただけませんでした」

喜八郎が箸をおいて茶を飲んで立ち上がると

「もう召し上がらないのですか。しっかり食べないとお役目を果たさせませんよ」返事をせず、自室に向かおうとした喜八郎に、母の言葉が被さった。

「そういうえば、その書院番も妻を娶ったばかりだったということでした」

「それはたしかなことですか」立ち止まって、母に背を向けたまま、念を押すように聞いた。

「先代のお殿様はいろいろお噂がありましたからね」

「どんなお噂ですか」

「何しろ女好きな方で側室を七人もお置きになり、十六人もお子をお産ませになりました。その全てを嫁入り、婿入りさせるのに重責がたはご苦労なさいていましたよ。詳しく知りませんが、庄助は知っているでしょう」

庄助に確かめるとその書院版の妻は、江戸でそのまま殿に召し抱えられ、松江に戻ることなく二十四歳で病んで死んだという。

三の丸の貝殻町にある数馬の家の式台の前で案内を乞うと、亭主自らが足音を立てて出てきた。

「おう、喜八郎。どうした。珍しいではないか」

「二の丸に用があつて来たが、久し振りに顔が見たくなった。中川の藩校で顔を合わせていた以来だな。あれから八年になるぞ」

「一杯やろうとしていたんだ。あがれよ」喜びを素直に表しながら数馬は座

敷に案内してくれた。

「これがそれがしの嫁のタミだ。どうだ、美人だろう。綺麗だろう！」まるで茶人が自慢の茶碗を見せるように、数馬は嫁を手放しで褒めて、自慢した。

「俺の両親は子の年の疫病で相次いで死んだが、喜八郎の両親は息災だろうな」

「父はあの年の次の年に亡くなった。母は元気だが、口うるさいので閉口している」喜八郎は顔をしかめてみせた。

「タミ殿の郷は、それがしの母登志子と同じ奥出雲亀嵩であると聞きましたか？」

「はいさようございます。」顔を赤らめながら、喜八郎と目を合わせたタミは、母の登志子に通じる美しさがあると思った。

数馬と新妻に会って以降、喜八郎は裏山へ行くのをやめた。終日部屋に籠って数馬を助けたいと思案を凝らしたが、簡単ではない。なにより、桜が散るまで日数は四日ほどしかない。

障子が明らか始め、思案がついた喜八郎は月照院の鐘の音を聞きながら書状を2通書いた。

1通は数馬に宛てたもので、庄助に「明日の花見の誘いだから」と直ちに届けさせた。もう一通は母上に宛てたものである。

翌日の朝、障子の向こうは暗かったが、起き上がると、刀を取って庭に降り【暇乞い】の奥義（壱）を繰り返した。鳥肌が立っていた身体に汗が滲んだ。

朝餉を終えて敷居台に腰を下ろし、母から弁当と、瓢箪を受け取ると、腰に確り結び付けた。懐から昨晚書いた書状を取り出し、母に渡すと外へ出た。

木次稻荷は城の北側を流れる剣先川の土手にある桜の名所である。町人と武士の花見の場所は自ずと別れる。町人は数が多く、芸者衆や太鼓持ちに三味線を弾かせて陽気に騒いでいる。一方で侍方は、多くても五人位が静かに

酒を酌み交わしている。中には手伝い女や下男を連れた武家の妻女もいる。

喜八郎はその中を上流にある木次神社に向かった。

数馬は鳥居の前で待っていた。

「待たせたかな」

「いや、刻限より前に来ていた。子供のころ二人でこの川で遊んだな！河童の川流れと滝滑！」目を合わせ、声を出して笑い合った。この流れの先に「鬼の舌」という滝がある。滝が流れ落ちたところに並ぶ、平らな大岩に、夏になると子供たちが誘い合ってやって来る。岩の表面は滑らかでも、何十回も滑っていると尻が赤くなる。

「尻の皮が擦り剥け、禪が解けたのには参った」川から出られずいた喜八郎に数馬は、下流で待つように目で合図すると、誰にも知られないように脇差と着物を持ってきてくれた。

「あの時は本当に助かったぞ」数馬の杯に酒を注ぎながら、喜八郎はしみじみとした口調で言った。二人が緋毛氈を敷いたのは、川の淵の近くの桜の老木の下で、武士たちの近く、町人たちからは少し離れていた。

「まだそんな子供の頃のことを言っているのか、早く後添えをもらえよ」

「いや、あれで俺は大恥をかかずに済んだ。今度は俺がお前を助ける番だ」そう言って、数馬の杯に再びは酒をそそいだ。

「なんだ。どういう意味だ」喜八郎は数馬の問いに答えず、頭上の桜を見あげた。重なり合った枝にたわわに咲いた花は、微かな風にも、舞い散った。

「数馬。貴様は散らすには惜しい桜だ」落ちてくる花びらを杯に受けながら喜八郎は言った、俯いて重箱をつついていた数馬が不審げに顔を上げた。

「喜八郎。俺を斬るつもりか」そういった時には既に数馬は右横にある刀を左に移し、片膝を立てていた。抜き打ちが出来る構えであった。

「貴様の妻は美しすぎたようだ」

「どういうことだ」数馬が聞いた。

「殿は江戸おもても同じことをなさって、婚礼を挙げたばかりの家臣が、上意打ちに合って妻を召し上げられた」

「なるほど」全てを悟った数馬に喜八郎は顔を寄せた。

「そういうことだ。……」二人は話を続けた。その間も、桜は頭上に絶え

間なく降った。

話し終えて、喜八郎が再び数馬の盃に酒を注ぐと、数馬は「きさま。それでも友か」盃を叩き鯉口を切った。此れを見届けた喜八郎はことさら声を上げて空に向けて。

「西川数馬 上意である」上意という言葉聞いて、町人たちは気づかないが、周りの侍たちは総立ちになった。

二人は刀の鞘に手をおくと、緋毛氈を蹴って無言のまま摺り足で川の傍に寄った。静まり返った侍たちをみて、町人たちも三味線の音を止めた。聞こえるのは川の瀬音だけである。

喜八郎が無言で刀を振り上げると、間髪入れず、数馬も刀を抜きあげた。鋭い金属音がして、二刀は夫々真ん中から折れた。数馬は左手で傷を負った肩を抑えて川の流れに倒れ込んだ。侍たちが川の傍に駆け寄った時には、数馬は一度水底に沈んで仰向けに浮きあがって、下流へ流されていくところだった。侍たちは数馬を見捨てる、喜八郎を取り巻き、口々に

「お見事でござる。殿のご上意を立派に果たされました」と褒めそやした。

「今日見たことは、それがしが藩庁に何時でも証言致そう」恰幅のいい中年侍が袴の脇を揃えながら言った。喜八郎は、折れた刀を鞘に納めると

「良しなにお問い合わせ致します」と言い、足早に立ち去った。

数馬は手足をユラユラ微動して、川下に向かった。この泳ぎは（河童の川流れ）といい、得意とする泳ぎである。

流れ着いた中州には、未の刻ごろから一隻の釣り舟が泊まっていた。キセルを手に岸を眺めている船頭は庄助である。岸には、人の丈ほどもある葦が生い茂り、中州の様子は見えづらい。舟からも葦の向こうは見えにくい。船頭の横に立っているのは喜八郎の母の登志子と娘の喜代、数馬の新妻タミもいる。三人は脱藩した息子や父、夫に見送られて、亀嵩に向かおうとしていた。

葦をかき分け、数馬に遅れて中州に辿り着いた喜八郎に、庄助は艫を竿に持ち替え、大きく手を振り、その竿で中州をトントンと突いた。舟は大川の先の外海に静かに動き出した。

京に上って、公家方に「水戸学」を学びたい数馬と、山伝いに伯備をぬけて諸国の道場で剣技を極めたい喜八郎は、肩を並べ、定かには見えない舟を見送った。

了